



| | |
|------------|---|
| Title | 沖縄県多良間島における伝統的社会システムの実態と変容に関する総合的研究(表紙, はしがき, 目次) |
| Author(s) | 高良, 倉吉; 池宮, 正治; 山里, 純一; 玉城, 政美; 川平, 成雄; 赤嶺, 政信; 狩俣, 繁久; 大胡, 太郎 |
| Citation | |
| Issue Date | 2000-03 |
| URL | http://hdl.handle.net/20.500.12000/9027 |
| Rights | |

377.7

TA

1999

平成9・10・11年度文部省科学研究費補助金（基盤研究B）

5.7
7

研究成果報告書

沖縄県多良間島における伝統的社会システムの

実態と変容に関する総合的研究

課題番号（09410095）

平成12年3月

琉球大学附属図書館



0020044008490

研究代表者 高良倉吉

琉球大学法文学部

はしがき ー研究の経過と目的ー

研究代表者 高良倉吉

多良間村は多良間島・水納島の2つの有人島よりなる行政単位で、宮古島と石垣島のほぼ中間に位置し、宮古郡に属している。主島の多良間島は東西約8 km、南北約6 km、面積約20 km²、楕円形の小島である。全体が標高約10mの低平な島で、琉球石灰岩に覆われている。多良間島に仲筋・塩川の2集落が、水納島には人口10名に満たない過疎化した集落がある。2000年1月現在の村人口は1431人（486世帯）である。

島の考古学的な調査は近年始まったばかりであり、宮古史・先島史のなかでどのような歴史的位置を占めるか不明の点が多い。伝承では、島内にいくつもの単位集団（ムラ）が存在し、それらが長い時間をかけながら集合し、現在の仲筋・塩川の2集落に統合されたという。古琉球期には土原豊見親と称される英雄がおり、首里王府に貢献した働きによりはじめて「多良間島主」に任じられたという。

近世では「宮古島」（宮古郡に相当する行政単位名）を構成する平良・下地・砂川3間切のいずれにも属さず、特別行政区「多良間島」（多良間島・水納島を総称する行政単位名）として扱われていた。首里大屋子・塩川与人・水納目差・多良間目差の4職が囃役人としてこの島を統治し、その下に耕作筆者・杣山筆者・小横目などの役人が配置されていた。島嶼行政の拠点が「多良間島番所」（現在の村役場敷地）であり、島外とを結ぶ海上交通の拠点として前泊浜（現在の前泊漁港）が用いられていた。1908年（明治41）施行の特別町村制により平良村の所轄となり、1913年（大正2）には独立して多良間村となって現在に及んでいる。

毎年旧暦8月に行われる豊年祭（八月踊り）は国の民俗無形文化財に指定されており、多良間を代表する伝統行事として内外に知られている。宮古遠見や八重山遠見、土原豊見親夫妻の墓、数々の御嶽、墓など名所旧跡の豊富さでも広く知られている。注目されるのは、量的にかならずしも多いというわけではないが、多彩な古文書が島に伝承されており、その中でも『多良間往復文書控』や親里家文書、系図家譜などは史料的价值が高い。

多良間村は『村誌たらま島』（1973年）を発刊した後、本格的な村史編集事業に取り組んでおり、島の芸能や民俗、古文書、近代資料を相次いで集成している。また、図書館を建設したほか、ふれあい民俗館を開館させるなど文化事業にも熱心に取り組んでいる。

* * *

ところで、私たち共同研究者が属する琉球大学法文学部は、ここ5年ほど学部改組の荒波にもまれてきた。史学科（史学・地理学）と文学科（国語国文学・英文学）、社会学科の3学科が統合されて人文学科が発足したかと思ったら、教養部廃止にともない再び編成替えが断行され、史学・国語国文学・英文学で「国際言語文化学科」（日本文化・東洋文化・

英米文化・ヨーロッパ文化・言語情報の5専攻課程)を、考古学・地理学・社会学科系で「人間科学科」をそれぞれ形成することとなった。その間、大学院人文社会科学研究所(修士課程)が発足し、その中に「アジア社会文化」領域(日本史・東洋史・琉球史・考古学・日本文学・中国文学・琉球文学・近代沖縄文学・日本語・中国語・琉球方言など)が誕生した。こうした新事態を迎えて、教育・研究に従事する私たち教官がまずは一致団結することが重要であり、教官のチームワーク・スピリッツの構築なしに新しい体制を効果的に運用することはできないと思った。そのためには、共通の調査・研究目標を設定し、その達成に向けて努力することである。文部省科学研究費補助金を申請し、プロジェクトチームを結成したのはそのための一つの試みであった。

数度にわたる協議を経て、調査対象に多良間村を選んだ。歴史・文学・言語・民俗・経済史の各分野において魅力的な問題を含んでいるのみならず、伝統芸能を対象に新しい調査・記録方法のあり方を検討することも可能だからだ。つまり、一つのまとまりを持った地域を相手として、共同で勉学できる条件を備えている。那覇から平良へ、平良から多良間へと飛行機を乗り継いで行かねばならない距離感も好条件の一つである。さらには、沖縄研究・琉球研究のなかでしばしば希薄となりがちな先島問題を、その「奥座敷」の一つである多良間を相手に自己認識を磨くという課題にも触れ合う。

そうした問題意識をふまえて、テーマを「沖縄県多良間島における伝統的社会システムの実態と変容に関する総合的研究」とした。

* * *

共同研究者以外の若手研究者や大学院生、地元専門家などにもお手伝いいただいて、各種の資料調査やフィールドワークを展開した。調査結果がまとまった時点で何度か研究会合を持ち、それぞれの成果を点検しあった。また、研究のとりまとめ時点においては、宮古島の平良市で宮古郷土史研究会と共同でシンポジウムを開催し、多良間の専門家にも参加していただいて、多良間をめぐる問題について討論した。

本成果報告書には、研究分担者による個別報告のほかシンポジウムの概要、関連記事、そして多良間関係の文献リストを掲載している。多良間研究はもとより多良間という個性的な島嶼を通じて見える地域社会の実態、変容の問題を考える参考となればさいわいである。

* * *

本研究を進めるにあたり、渡久山春好先生をはじめとする多良間村の関係者、仲宗根將二氏をはじめとする宮古郷土史研究会の方々、沖縄県立図書館宮古分館、大学院生の大城涼子、城間有、中所亜紀、仲間恵子、学部学生の関戸塩、井川彦造の諸氏のお世話になった。記して感謝の言葉をお伝えしたい。

研究課題

沖縄県多良間島における伝統的社会システムの実態と変容に関する総合的研究

研究組織

研究代表者

高良 倉吉 (琉球大学 法文学部 教授)

研究分担者

池宮 正治 (琉球大学 法文学部 教授)

山里 純一 (琉球大学 法文学部 教授)

玉城 政美 (琉球大学 法文学部 教授)

川平 成雄 (琉球大学 法文学部 教授)

赤嶺 政信 (琉球大学 法文学部 教授)

狩俣 繁久 (琉球大学 法文学部 助教授)

大胡 太郎 (琉球大学 法文学部 助教授)

研究協力者

鈴木 寛之 (琉球大学 法文学部 助教授)

渡久山 春好 (多良間村立ふるさと民俗資料館館長)

仲宗根 将二 (宮古郷土史研究会会長)

藤江 淑恵 (琉球大学大学院人文社会科学研究科 1997年度修了)

大城 涼子 (琉球大学大学院人文社会科学研究科)

城間 有 (琉球大学大学院人文社会科学研究科)

中所 亜紀 (琉球大学大学院人文社会科学研究科)

仲間 恵子 (琉球大学大学院人文社会科学研究科)

関戸 塩 (琉球大学法文学部人文学科)

井川 彦造 (琉球大学法文学部人文学科)

研究経費

平成 9年度 5, 300千円

平成 10年度 2, 600千円

平成 11年度 1, 900千円

研究業績

- 高良倉吉(2000) 「羽地仕置」に関する若干の断章 (『琉球大学法文学部紀要 日本東洋文化論集』第6号、111頁～123頁)
- 池宮正治(2000) 組踊に関する資料三件 (『琉球大学法文学部紀要 日本東洋文化論集』第6号、15頁～34頁)
- 山里純一(1999) 「噫急如律令」考 (『琉球大学法文学部紀要 日本東洋文化論集』第5号、1頁～18頁)
- 狩俣繁久(1999) 宮古諸方言の動詞の「終止形」の成立について (『琉球大学法文学部紀要 日本東洋文化論集』第5号、27頁～51頁)
- 狩俣繁久(1999) 音声の面からみた琉球諸方言 (『ことばの科学』第9号、13頁～85頁)
- 高良倉吉(1998) 琉球王国の展開 (『岩波講座世界歴史』第13巻、77頁～96頁)
- 川平成雄(1998) 戦時統制経済下の沖縄の糖業 (『琉球大学法文学部紀要 経済研究』第56号、77頁～91頁)
- 山里純一(1998) 日本古代史料にみえる南島 (『史料編集室紀要』第23号、167頁～208頁)
- 川平成雄(1998) 戦後恐慌・ソテツ地獄・沖縄振興計画 (『沖縄戦研究』第1巻、18頁～48頁)
- 高良倉吉(1997) 地域と海域——琉球王国における「内なる海」の事例から (『地域の世界史』330頁～360頁)
- 川平成雄(1997) 戦時統制経済政策のなかの沖縄農家 (『琉球大学法文学部紀要 経済研究』第53号、203頁～219頁)
- 赤嶺政信(1997) 沖縄における祖先祭祀の成立 (『宗教研究』第71巻1号、55頁～78頁)
- 山里純一(1997) 琉球の木簡二題 (『木簡研究』第19巻、251～255頁)
- 山里純一(1997) 八重山・大浜の昔話 (『奄美沖縄民間文芸研究』第20号、31頁～46頁)

沖縄県多良間島における伝統的社会システムの
実態と変容に関する総合的研究

— 目次 —

| | |
|-------------------------------------|------------|
| はしがき | 高良倉吉 (1) |
| 多良間島の歴史的特質 — 近世琉球史に係わる二、三の問題から — | 高良倉吉 (7) |
| 近代多良間島の生産 — その経済史的側面 — | 川平成雄 (13) |
| 多良間島方言の系譜 — 多良間方言を歴史方言学的観点からみる — | 狩俣繁久 (27) |
| 多良間の「玉黄記」について | 山里純一 (38) |
| 多良間の民俗・二題 | 赤嶺政信 (50) |
| 多良間島の口承伝承をめぐる若干の考察 | 鈴木寛之 (61) |
| 土原豊見親考 | 藤江淑恵 (70) |
| 多良間の組踊り台本に関する若干のコメント | 池宮正治 (94) |
| 学術シンポジウム「多良間を考える」開催報告 | (99) |
| 多良間島研究文献一覧 | 大城涼子 (127) |